

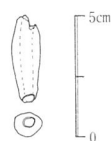
第6トレンチ 釈迦坊川左岸近くに幅2m、長さ15mのトレンチを設定し、深さ約1.2m掘削した。遺物は第4.5層から土師器、陶磁器の細片が出土したが、遺構は検出できなかった。

第7トレンチ 幅2m、長さ16mのトレンチを設定し、深さ約1.0m掘削した。土層断面はほとんど水平堆積である。第4～5層より土師器1点、陶磁器1点出土しているが、細片のため詳細は不明である。

第8トレンチ 釈迦坊川右岸に設定した幅2m、長さ16mのトレンチである。GL—1mまではシルト層が水平に堆積し、それ以下は礫層である。第2層の上面から軒丸瓦の破片が1点、瓦器椀が1点出土しているが図化不能である（第17図）。

第9トレンチ 第8トレンチと同様ほとんど水平堆積である。トレンチほぼ中央部のGL—1.5mのところでは有機質の堆積を検出したが人為的なものではない。

耕土内からほぼ完形に近い土師質の管状土錐が1点出土した。胎土は密で焼成は良好である。外面わずかに指なでが残る。時期は不明である（第18図、図版8）。



第18図 第9トレンチ出土土錐

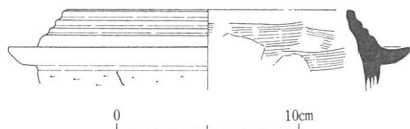
第10トレンチ 釈迦坊川の左岸で幅2m、長さ15mのトレンチであるが、雨のため壁面が壊崩し、9mのみの断面実測である。土層はほとんど水平堆積で厚さ0.1～0.3mのシルトないし細砂である。第4層で陶器片1点出土した。

第11トレンチ ほぼ水平堆積のみであるが、トレンチ東寄りに盲暗渠の跡を検出した。

第12トレンチ 幅2m、長さ11mのトレンチで深さ1.5m掘削した。0.1～0.2mのシルト、砂礫層等が水平堆積しており遺物は検出できなかった。

第13トレンチ 釈迦坊川の低いマウンド状の部分に幅2m、長さ9mのトレンチを設定した。GL—0.8mまでは黄褐色系のシルト、細砂等が水平堆積し、その下は暗灰色の細砂、砂礫層が山側から谷側に傾斜して堆積している。遺物は検出できなかった。

第14トレンチ 段丘崖直下の畑地に幅2m、長さ10mのトレンチを設定した。崖に近いため耕土・床土直下は地山である。



第19図 第14トレンチ出土土錐

床土下底部から瓦質羽釜1点、瓦器椀片15点が出土している。いずれも13世紀代のものと思われる。瓦質羽釜は復元口径15.6cmと小形で、口縁部外面に3条の凹線がめぐらされる。外面はケズリ、内面はハケメが施されている（第19図、図版8）。

第15トレンチ 釈迦坊川左岸の丘陵に沿う段丘上に幅2m、長さ10mのトレンチを谷の走行に直交して設定し、GL-1.2mまで人力により掘削して調査した。その結果トレンチ中央部で壇状遺構（石列）を検出した他、断面観察によって土器溜、瓦溜等を確認した。

トレンチ上部は耕土、床土、灰黄色砂礫層が水平に堆積し、その下の西半には黄褐色系のシルト層、細砂層、砂礫層が幾層にも複雑に堆積している(第17図)。これらの層は平均10cm前後の厚さを持ち、人為的な整地層と考えられる。この整地層はトレンチ中央からやや東で段落ちとなり、その東側には瓦溜（第16層）が形成されている（第20図）。瓦溜は近世を中心とする瓦を大量に含み厚さは20cm前後である。この整地層と瓦溜の関係から、整地層は下部の石列と同様な壇状遺構になる可能性があるかもしれない。

また、トレンチ西端部には整地層上面から切り込む小規模な土器溜があり、小形瓦器碗を中心とする土器群が出土した。

整地層段落ちの下部、トレンチほぼ中央部のGL-0.9m付近でトレンチを横断する石列を検出した（第20図）。

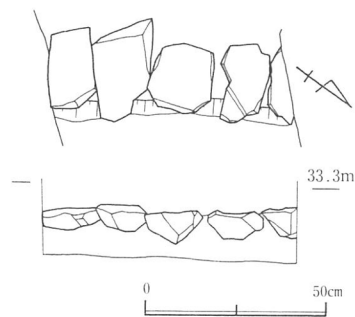
検出した石列は、石を一段・一列に並べたもので、トレンチ内をほぼ東～西方向に横断し、両端を調査区外に伸ばす。石列は、平均20×10cm、厚さ5cm前後の扁平な割石を用い、北側の面を揃えるように作られている。

石列を境として南側は、石の下面で平坦面が広がり、石列より北側では、現状で約30cm前後（石の上部からは約35cm前後）垂直に削られている。

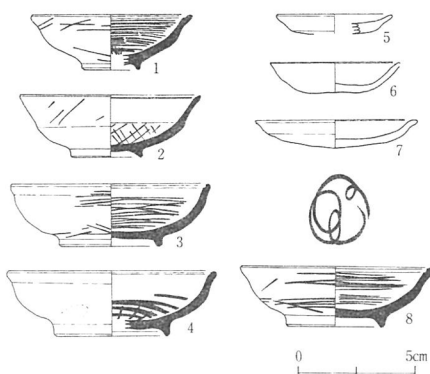
今回の試掘調査では、石列より北側の地山ラインについては、深掘していないので、石列南側との正確な落差は不明である。北側が現状よりさらに下がる可能性は十分に考えられる。石列より南側の平坦面には、ピット等の遺構は検出されていないが、現状では、北側の落をもって、壇状の遺構と考えておきたい。

トレンチ西端の、整地層を切込む小さな土器溜（第8層）から小形瓦器碗を中心とする土器群、トレンチ東部の瓦溜（第4層）から大量の瓦が出土した。本調査中で最も遺物出土量の多いトレンチである。

第8層出土遺物は8点の図化可能遺物があった。1～4・8は小形瓦器碗、5～7は土師皿である（第21図、図版8）。3は口径8.4cm、器高2.7cm、高台径4.2cmを測る。内面は



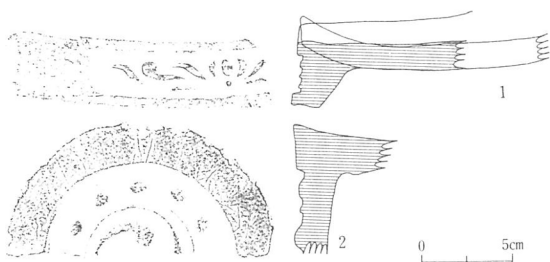
第20図 第15トレンチ石列



第21図 第15トレンチ出土土器

細いヘラミガキを何条にも施し、口縁部直下に沈線をめぐらす。外面にもヘラミガキ痕が残る。見込み部は保存状態が悪く暗文の形状は不明である。4は口径8.8cm、器高2.8cm、高台径4.8cmを測る。外面は指おさえ、内面はやや太い放射状の暗文がみられる。以上の2点は土器溜上部から出土した。

以下の6点は土器溜下部からの出土である。1は口径7.8cm、器高2.7cm、高台径3.0



第22図 第15トレンチ出土土瓦

cmを測る。外面わずかにヘラミガキが残り、内面は細い斜格子の暗文を施す。若干古い様相をもつものと思われる。2は口径6.9cm、器高2.4cm、高台径2.5cmを測る。外面にヘラミガキ、内面は密にヘラミガキを施した後わずかに放射状

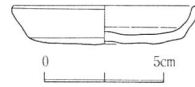
の暗文がみとめられる。8はやや口径が大きく8.2cm、器高2.6cm、高台径4.0cmを測る。器厚はやや厚い。外・内面共に丁寧なヘラミガキを行い見込みはラセン状の暗文を施す。以上の5点の小型瓦器碗は12世紀代に位置づけられよう。5～7は土師皿である。いずれも細片のため不明な点が多い。

第4層（瓦溜）からは総数約600点の瓦が検出された。内面に布目痕を有する瓦片が約90点検出されたが、大半は江戸時代以降の丸瓦、平瓦である。瓦当面は巴文軒丸瓦3点、軒平瓦5点を検出したが完形品は1点も認められず、すべて廃棄された瓦と思われる。下層より石組遺構が検出されており今後二期したい（第22図、図版8）。

第16トレンチ 耕土・床土の下は黄褐色シルト層で、東端ではGL-0.7mで地山である。地山レベルは西端（山側）で上昇する（第17図）。床土から土師器細片2点が出土した。

第17トレンチ 深さ0.5mを掘削した。耕土、床土下は灰白色砂礫層、灰白色混礫層、明黄褐色シルト層が西から東へ向かって傾斜しながら堆積している（第17図）。遺物は床土内から土師皿2点、瓦器碗片7点、サヌカイト剥片1点（図版8）が出土した。サヌカイトは付近からの混入と思われ、縄文時代のものであろう。

第18トレンチ 耕土の下は明黄褐色砂礫土層、にぶい黄褐色砂礫土層、黄色シルト層が堆積し、第2・3層から瓦、土師器、瓦器が出土した。黄色シルト層上面はピットと思われるものがあり、遺構面になるものと思われる。



第23図 第18トレンチ出土土師器

出土遺物は瓦26点、土師皿4点、瓦器1点がある。土師皿はやや厚みがあり口径7.8cm、器高1.6cmを測る。時期は不明である(第23図 図版8)。

3 ま と め

調査の結果、谷部のトレンチでは遺物は無いかごく少量で遺構も検出できなかったが、釈迦坊川左岸の段丘上の各トレンチから瓦、土師器、瓦器等を検出することができた。特に第15トレンチでは多くの遺物が出土するとともに、石列を伴う壇状遺構を検出した。分布調査で無縫塔、墓石の存在が確認されており、また周辺には「金剛寺」という地名が残り寺院の存在が伝承されていることと併せて検討すると、この段丘上に寺院遺構が存在するものと思われる。その時期の一端は今回の調査成果から12世紀代にあることが判明した。

第5節 箱作ミノバ石切場跡

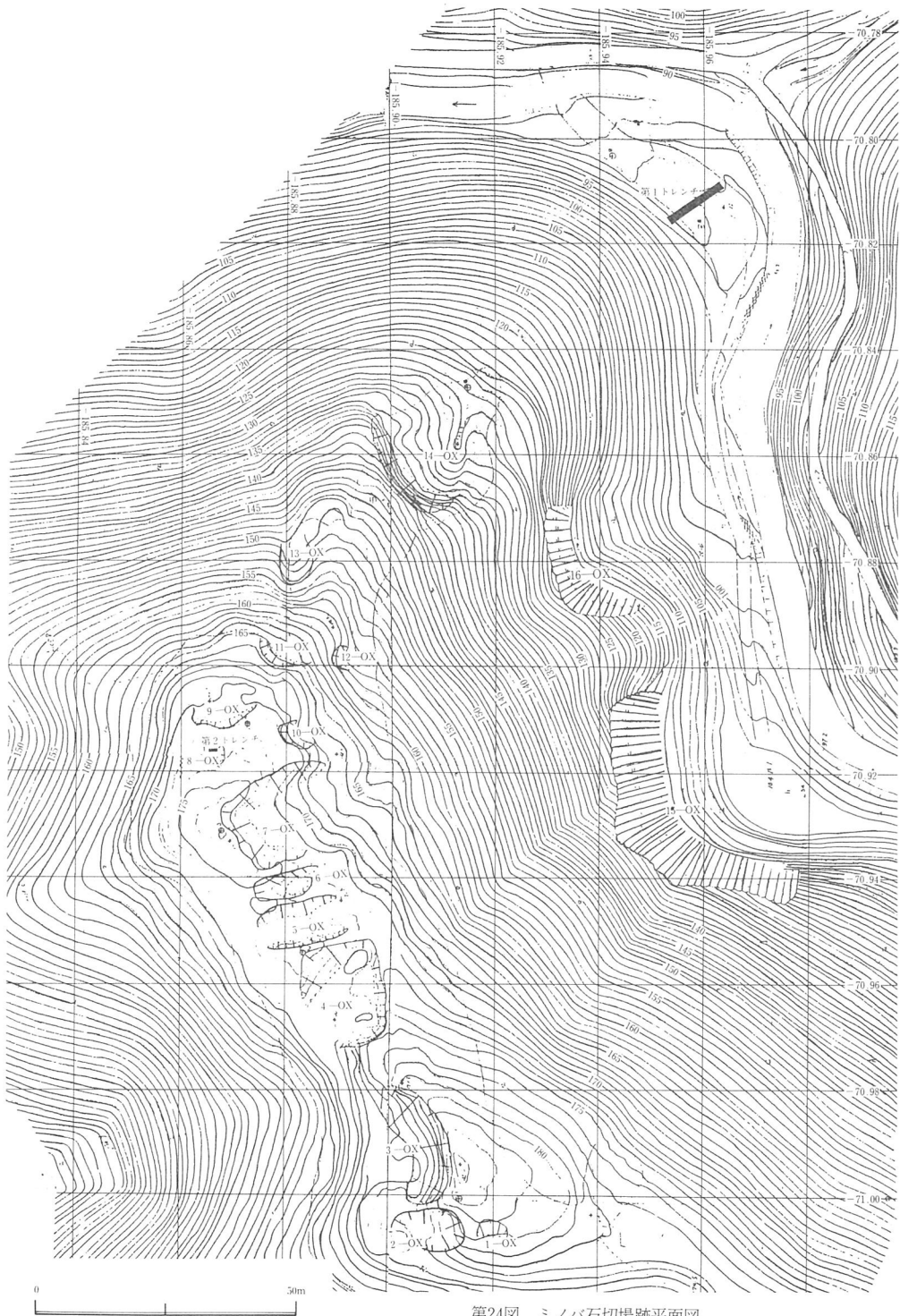
1 概 要

昭和60年度分布調査の成果に基づき、和泉砂岩の石切場のひとつであるミノバ石切場跡の一部伐開および試掘調査を実施した。

伐開により、標高160~185mの山頂、尾根部分で石を切り出した「切羽」(石材採掘場・以下本協会の調査規定に基づきOX⁽¹⁾の記号で表現する)を14箇所確認することができた。各切羽は近接し、山頂、尾根部分にはほぼ連続する形で分布する(第24図)。

現状で確認できる切羽の規模は、15m×15mから4m×3m程度のもので、大きさまで異なる。切羽の形状は、芯石の採り方によって異なり、3—OX・7—OX・10—OXなどに見られるような横方向から掘削し、平面半円形の窪地状を呈するものと、5—OX・6—OXのように縦方向から掘削し、溝状を呈するものとが認められる。また、採石は北から南に向かって傾斜する和泉砂岩の向斜方向に従って、南もしくは北方向からなされている場合が多く、不良材である皮石を除去し、良質の芯石を求め斜に深く入っている。また、山腹部分でも2箇所切羽が確認でき、今後、未伐開部分において、また伐開部分でも完全に埋没してしまっている切羽の検出が予想される。

それぞれの切羽の周辺部には、切り出した石材を一定の段階にまで荒加工するための



第24図 ミノバ石切場跡平面図

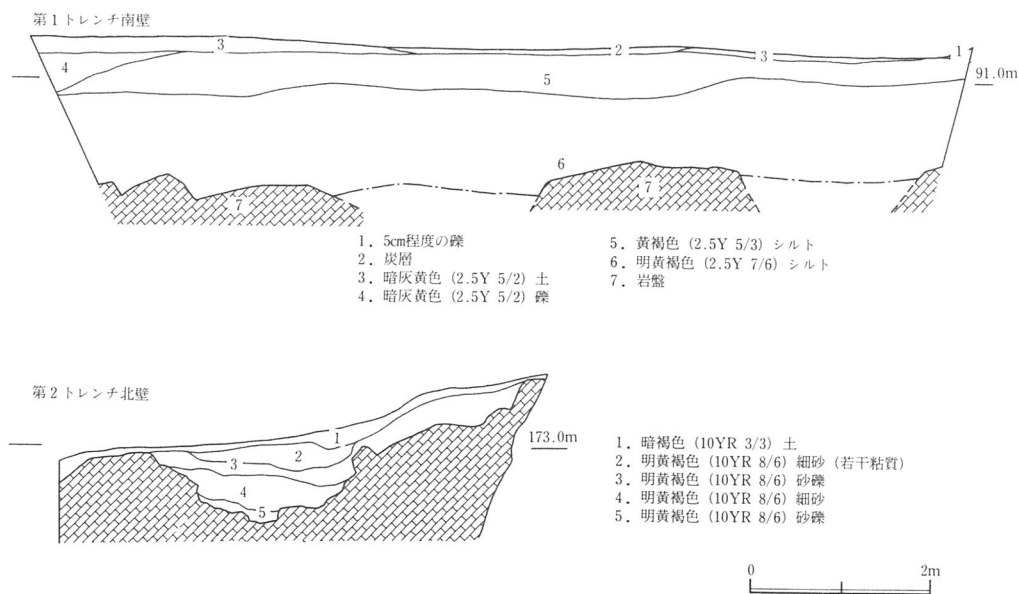
加工場が設けられている。これらの加工場には、20cm内外の剥片が集積する箇所と5cm程度のもものが集積する箇所があり、荒加工にも数段階の作業工程があったものとみられる。加工場は、ほぼ6～10m内外のひろがりをもつ。現在地表面で確認できた加工場は21箇所であるが、各切羽内の発掘によって増加するものと推定される。

加工場の周辺では、加工途中で廃棄された石材が散在し、加工上の失敗、もしくは用材にキズ等がある不良石材であったものと考えられる。また、廃棄されている石材のほとんどが石臼の製作を意図したものに限られるところから、ミノバ石切場では石臼の製作を主たる目的とした採石が行われていたようである。加工痕を有する石材は、第29図に示すように4—OX・5—OX・7—OX・14—OXにともなうと考えられる加工場付近とくに集中するようすがみられる。10—OXに集中する加工石材は掘削にともなって出土したものを含めている。これら加工石材は、各切羽の発掘によって増加するものと判断される。

2 試掘調査

今回の試掘調査では、ミノバ石切場の山裾平坦部（第1トレンチ）、山頂部分（第2トレンチ）、および10—OXの掘削を実施した。

第1トレンチ トレンチの設定は、飯ノ峯川端の平坦部分に石切り作業に伴う鍛冶場等の関連施設の存在が推定されたことによる。トレンチは幅2m、長さ10mで、GL—1.5まで



第25図 第1・2トレンチ断面図

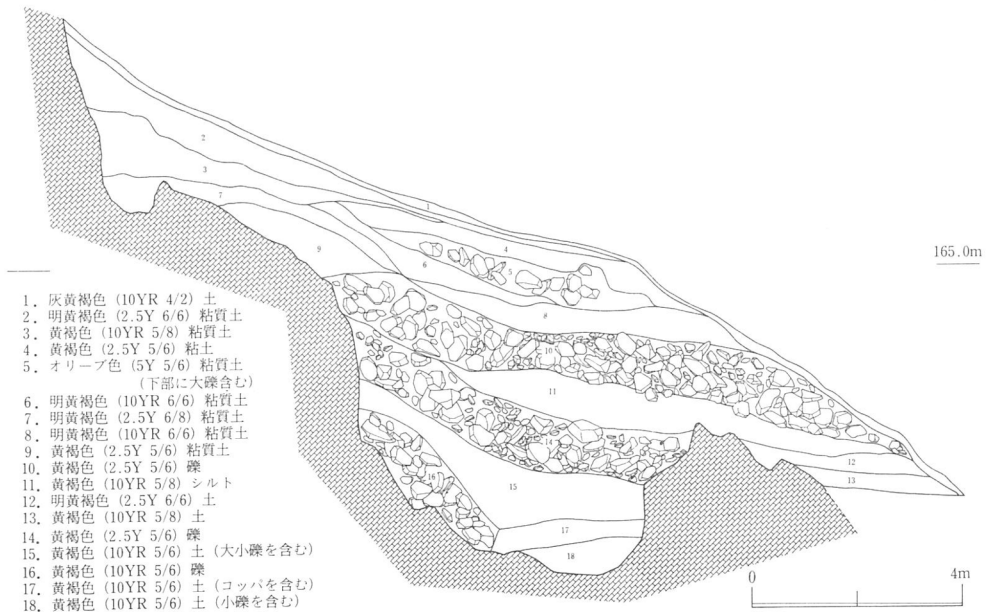
掘削。土層は、GL-0.6m で人頭大の砂岩礫を多量に含む礫層に達する（第 25 図）。遺構、遺物は検出されていない。

第 2 トレンチ 第 2 トレンチは切羽以外での土層堆積状況の調査を目的とするもので、山頂部分に幅 1.5m、長さ 2.4m のトレンチを設定した。土層は表土直下が砂岩の基盤層で、起伏部分に若干の砂岩風化煤乱土の堆積が認められる（第 25 図）。

10—OX 調査前の状況は、東西 5m、南北 7m 程度の規模をもつ浅い窪地状のものであったが、発掘の結果、東西最大幅約 10m、南北約 15m、最深部 GL-6.5m の規模をもつ切羽であることが判明した。

切羽内は、人頭大から 50 cm 大の大型の砂岩礫からなる礫層と砂岩の風化煤乱土である均質な黄褐色細砂層とによって形成される互層の堆積となっている。礫層は石切りに際して出る不要石材の廃棄によって形成されたものと考えられる。一方砂層の形成は、石切が継続して行われたのではなく数度にわたって断続的になされ、その断絶期になされたものと推定される。

礫層は厚いところでは約 1m にも達し、一回に行われた石切の規模を窺い知ることができる。砂層は 0.4~0.5m 程度の厚さをもつものであるが、砂岩の風化速度を勘案すると比



第26図 10—OX 縦断面図

較的短期間に形成されたものと考えられる。

この堆積状況から判断すると、10—OX では4回程度の石切が断続的に行われていたとみられる。その方法は、まず最深部分にあたる芯石の岩脈を探りあて、軟質な部分やキ裂の多い部分を残して採石が始まっているようである。またこの部分では、第18層から矢跡を残した石材が検出され、矢を使って石を切り出したものと推定される。また、第17層は、20 cm大の剝片（コッパ）で形成された層で、この第1回目の採石にともなう加工場とみられる。現状で判断する限り、この採石がもっとも良質の石材を得ることができたものと考えられる。

第2回目の採石は、北側尾根頂部方向に進んでおり、現状で露呈している砂岩の状況から、矢を使用した石切以外に砂岩の摂理面を棒状のもので剝ぐ、もしくはこじ起こす方法も採られたのではないかと考えられる。このことは、廃棄された石材の中に、人為的に割られたとみられる稜の鋭いもの以外に自然面をもったものが多く含まれていることから推定できる。この第2回目の採石にともなってもしくは1回目の採石の可能性もあるが、10—OXの前庭部分に2m×2m程度のひろがりをもつ加工場が設けられている。（第13層）

第3回目の採石は、この切羽で最も規模が大きい、もしくは、不良石材が多量に出た採石であったと推定される。廃棄されている石材の形状から、第2回目の採石とほぼ同様の手法が採られている。この採石では、現状でみられる砂岩の露頭からするとあまり良質の石材を入手することができなかつたものと思われる。この採石にともなうと推定される加工場が、切羽ほぼ中央西側に存在する。

最終の採石は、第5層にあたるもので、前段階までとくらべ小規模である。

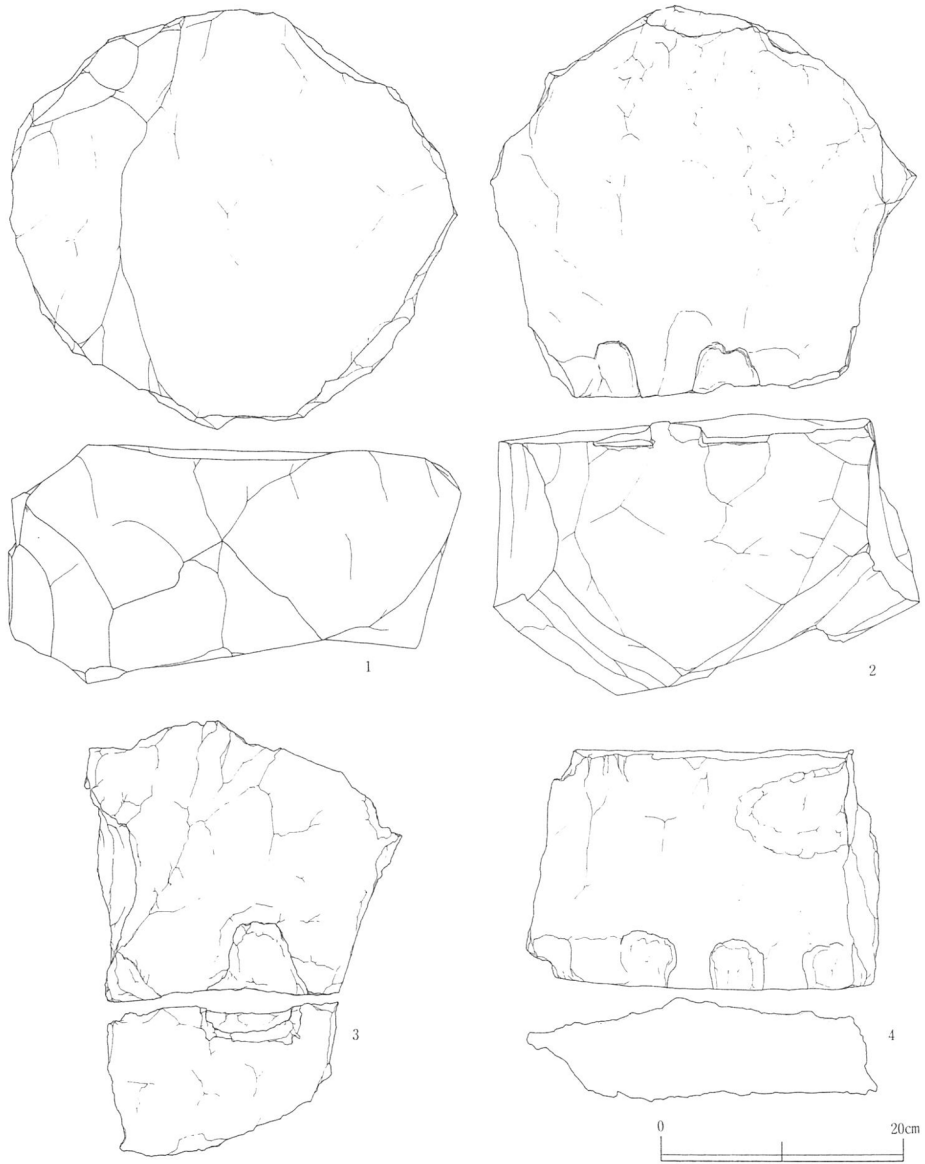
また、切羽内堆積土の内、西側部分では、隣接する7—OXの採石による堆積の影響を受けており、10—OXと7—OXでは採石が同時になされていなかったとみられる。

廃石層である第10・14・16層より、和泉砂岩の未製品10点と工具痕を有する剝片8点が検出されている（第27図）。加工石材はいずれも製作過程の初期段階に放棄されたもので、8点が石臼、2点が塔婆類の製作を意図したものである。

1・2は石臼未製品である。1は直径33.0×36.5cm、高さ15.0～19.4cmを測る。荒加工の段階で下部を欠損しており、中央にキ裂が生じている。2は直径29.4×35.0cm、高さ13.3cm～17.7cmを測り、幅5.5cm、3.5cm二種類の矢跡を残す。円形にはり回す際、一部を大きく欠損している。

3・4は加工の際に生ずる剝片である。4は製作過程のごく初期における不要石材であ

る。幅4.0cmを測る矢跡3ヶ所が平行して残り大型石材から剥ぎとったことが窺われる。風化が著しく遺存状態が悪い。3は次段階の細部加工で生じるやや小型の不要石材である。



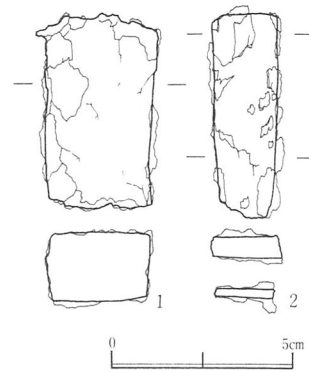
第27図 10-OX 出土石製品

幅6.0cmを測る矢跡1ヶ所を残す。

また、7—OXからの流土内で2点の鉄製品が出土している。いずれも残存状況はよく、地金の大半が遺存している(第28図)。

1は長さ5.1cmを測りくさび状を呈する。上部断面は方形を呈し3.3×3.0cmを測る。上方からの打撃が加えられたためか変形し著しく摩滅をみせる。

2は1よりもやや扁平で長さ5.7cm、上部は幅2.0cm、厚さ0.8cmの長方形を呈し、先端は狭まり幅1.5cm、厚さ0.3cmを測る。小型で薄いため豆矢の機能が考えられる。



第28図 10—OX 出土鉄製品

廃棄された石製品や不要石材に残された矢跡は様々な様相をみせ、製作時に用いられる工具は多くの種類と機能が考えられよう。

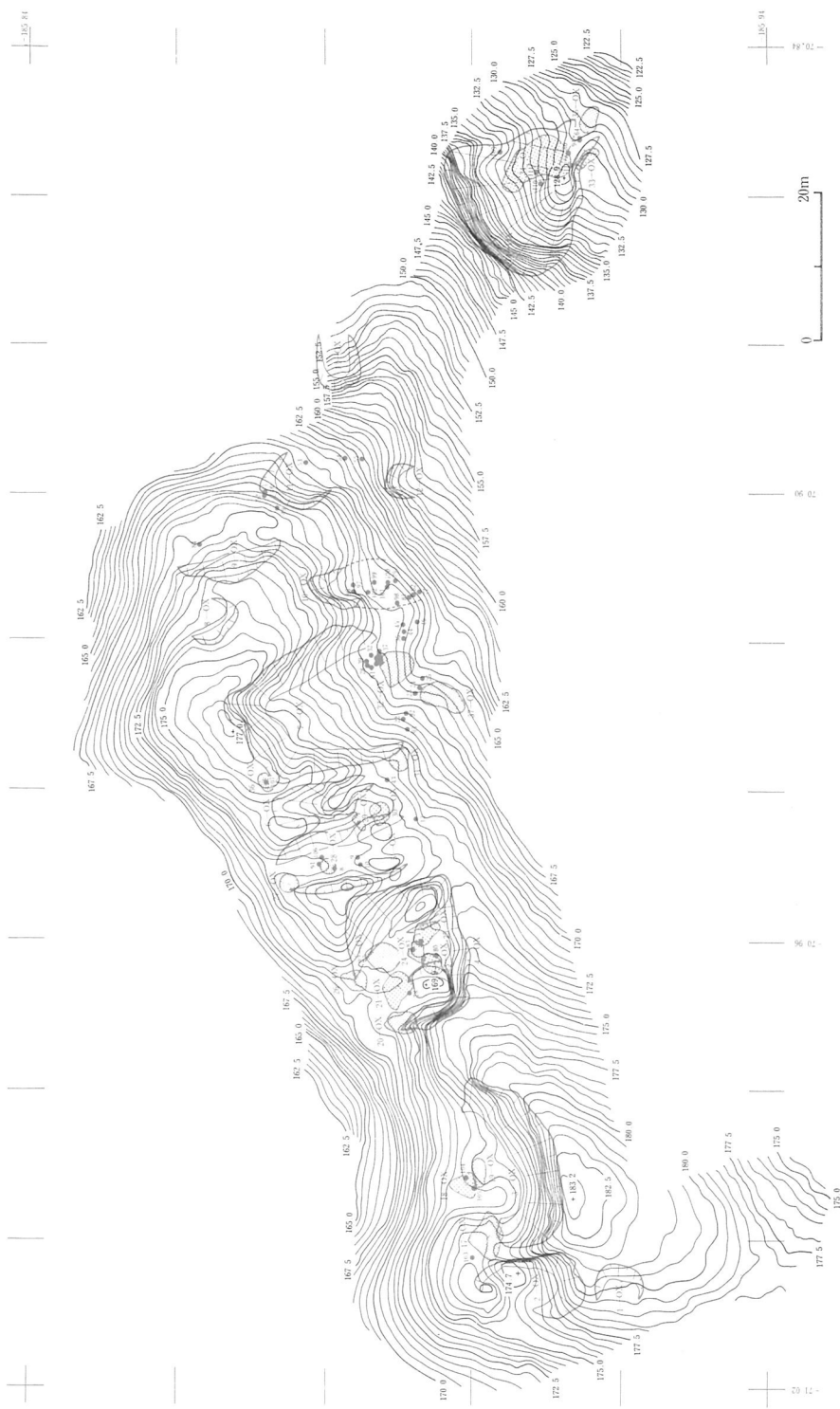
3 ま と め

第1トレンチを設定した飯ノ峯川端の平坦部分では、当初想定していた鍛冶場等の石切り作業にとまなう関連施設の存在は明らかにはできなかった。トレンチの設定場所が限られているため今後の調査が必要である。

切羽の集中する山頂部分に設定した第2トレンチでは、切羽以外の部分の表土下が砂岩の基盤層となっていることが判明した。

10—OXの調査では、この切羽が数次にわたる採石によって形成されたもので、現状で確認できる以上に埋没部分が存在することが判明した。10—OXの結果と各切羽の形状からすると、他の切羽についても一時の採石によって形成されたものではなく数次にわたって断続的に作業がなされていたものと考えられる。また、採石作業と同時に一定の段階までの加工が切羽の近接地でなされていたことが加工場の分布状況と加工途中で廃棄された石材のありかたから窺い知ることができる。この加工途中で廃棄された石材のほとんどが石臼の製作を意図するものであることから、ミノバ石切場では、おもにこれを目的とする採石がなされていたものと考えられる。一方、当石切場の操業については、時期を決定することができる資料が得られなかったため不明である。今後の詳細な調査が望まれる。

- (1) 今回検出した遺構は大別すると石材採掘場(切羽)と石材加工時の石屑の集積(加工場)の2種類があるが、本協会の調査規定によると現状ではともにOXで表現せざるを得ない。



第29図 ミノバ石切場跡加工場・未製品分布図

第V章 ま と め

昨年度の分布調査の成果により土砂採取事業予定地内において21個所の遺跡、遺物散布地、石造物等が確認された。本年度はそのうち工事計画が具体化している7遺跡の試掘調査が計画されたが、第I章で述べたように2遺跡については調査が実施できず、本書では昭和61年11月までに試掘調査を行った5遺跡の調査成果を収録した。

茶屋遺跡は土砂採取予定地の西北端部のせまい谷平野部である。分布調査の際も下流に比べ上流では遺物散布密度が薄いことが知られたが、試掘調査によっても遺物はほとんど出土せず遺構もなかった。

稲丸遺跡は土砂採取予定地の東辺の飯ノ峯川右岸の丘陵上にあり、対岸の井山城の一部をなす可能性が考えられていた。しかし調査の結果遺構・遺物は検出できず、城に伴う地形の人為的改変も確認できずその可能性は否定される結果となった。また尾根南の谷部には小規模な平坦面があり、寺院が存在したという伝承があった。しかし今回調査したトレンチではその痕跡は発見できなかった。

飯ノ峯畑遺跡は土砂採取予定地の東北辺にあり、茶屋遺跡よりやや広いが、やはり狭隘な谷底平野である。遺物散布密度はあまり高くなく、試掘調査によっても出土量は少い。遺構も検出できなかった。

金剛寺遺跡は1号進入路が予定されている釈迦坊川流域の上流である。当遺跡の北端付近から釈迦坊川下流の貝掛遺跡にかけては分布調査の際最も遺物散布量が多かった地点である。しかし上流になると散布密度は薄くなり、今回の調査によっても谷平野部のトレンチではほとんど遺構・遺物は検出できなかった。

しかし当遺跡北部の釈迦坊川左岸段丘上に設定した第15～18トレンチにおいて中世以降の土師器・瓦器・瓦等が出土し、第15トレンチにおいては石列を伴う壇状の遺構がある。また、周辺には「金剛寺」という小字名が残っていて、この段丘上に中世以降の寺院址があるものと考えられる。

ミノバ石切場跡は土砂採取予定地の東南端の丘陵の尾根筋から中腹にかけて14個所の石材採掘場（「切羽」）を確認し、そのうち第10号石材採掘場（10—OX）を調査した。その結果数回にわたる断続的な採石の過程が復原された。表面観察による石材採掘場の規模は採石の最終回の規模を表現するに過ぎない。石材採掘場を完掘すると断続的な採石の結果を

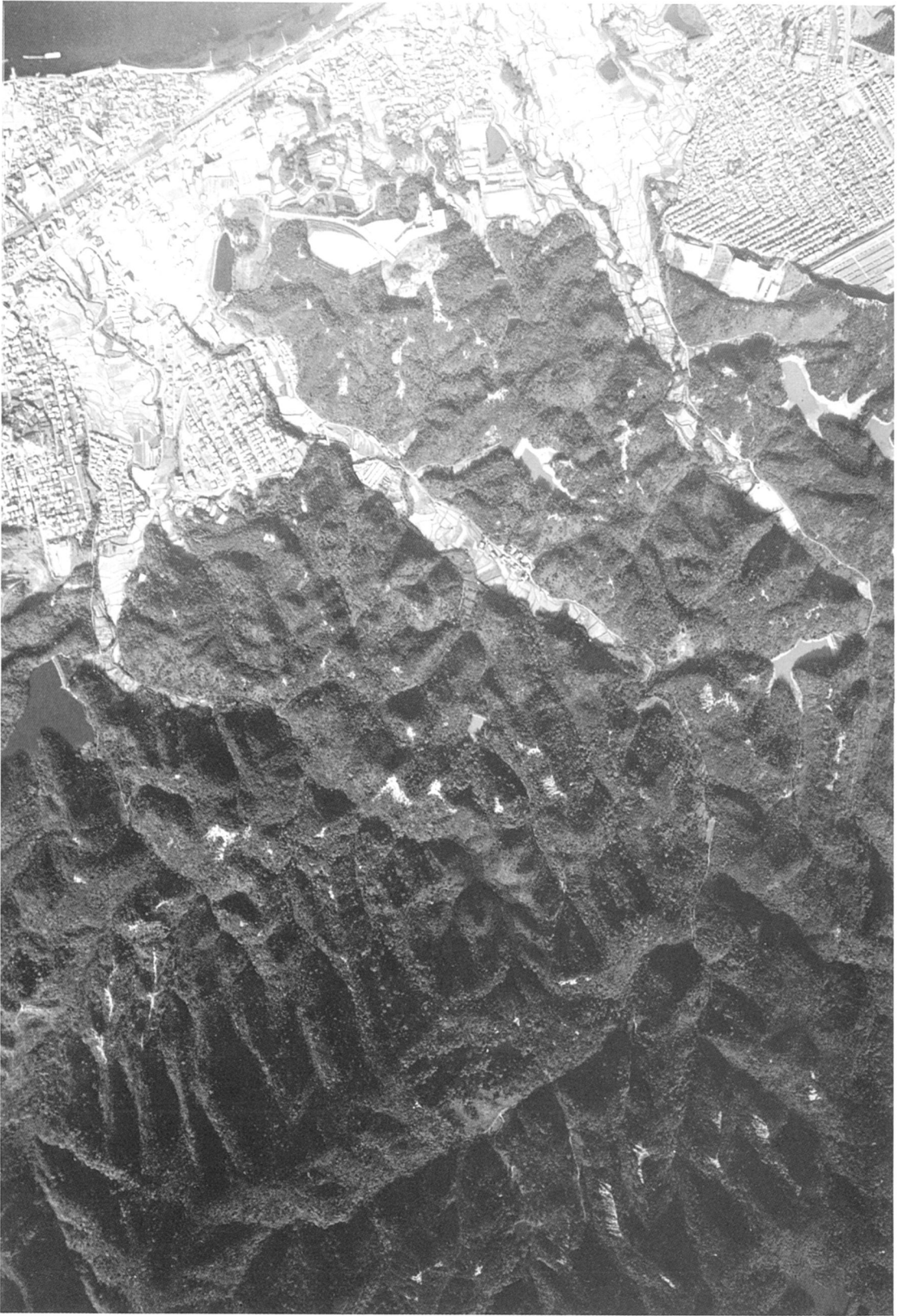
すべて露出させることになり、第10号石材採掘場の場合表面観察の数倍の規模に達した。出土遺物としては石臼等の未製品や鉄製の「矢」がある。また採石や加工に伴う石屑（「コップ」）は大量に出土した。しかし時期を確定できる遺物はなく、当地一帯の墓地における和泉砂岩製墓石の紀年銘や石切に伴う紛争の文書等から江戸時代後期以降と推定されるにすぎない。

他に2カ所のトレンチを掘削したが、石切に伴う工房跡、鍛冶場等の関連遺構は検出に至っていない。また山腹斜面は伐開していないので、未知の石材採掘場が存在する可能性も残されている。

以上の試掘調査結果により金剛寺遺跡と箱作ミノバ石切場跡の本調査が本年度内に予定されている。それにより両遺跡の内容はより明確になり、当地域の歴史に関する資料を増加させることになろう。

現在までに試掘できなかった2遺跡の他に土砂採取予定地内には井山城跡などの未調査の遺跡がある。土砂採取事業により工事範囲内の遺跡・文化財はその立地を含めて消滅することになる。従って今後万全の体制を持って調査・研究を進めてゆくことが必要である。

図版一 阪南丘陵航空写真





第3～5トレンチ付近遠景



第7トレンチ



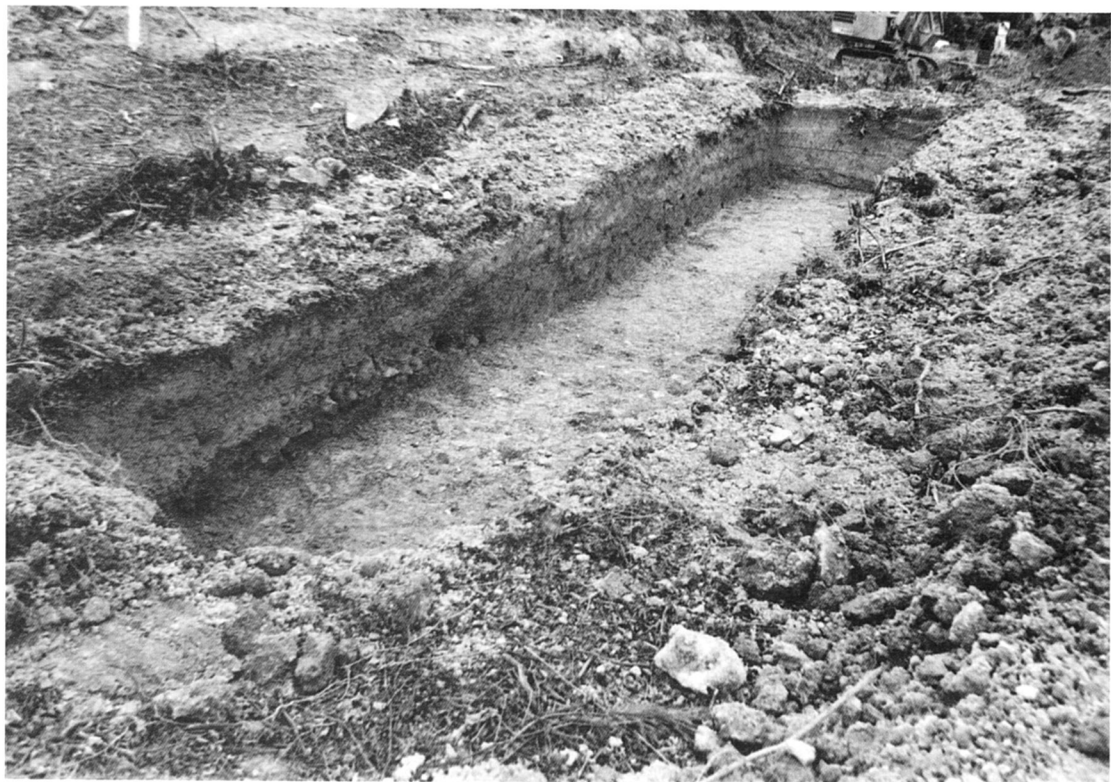
第1トレンチ



第2トレンチ



第6～8トレンチ遠景



第7トレンチ



第3トレンチ付近遠景



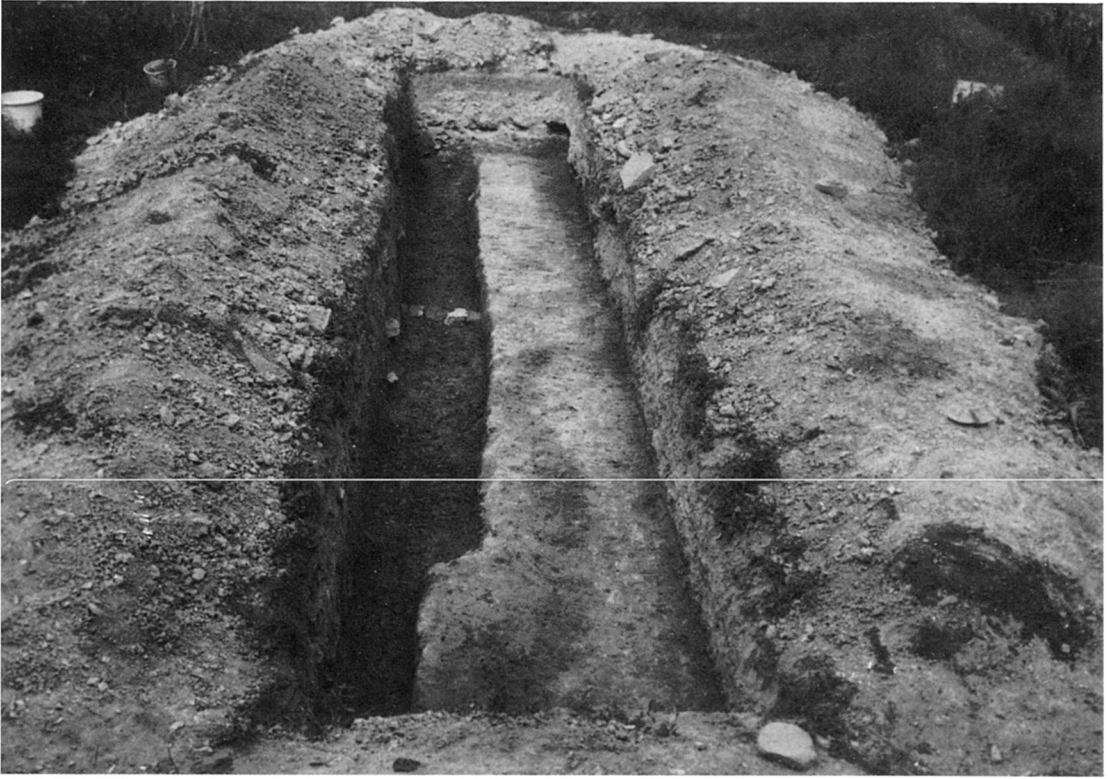
第5トレンチ



金剛寺跡遠景



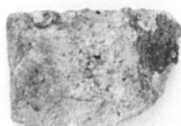
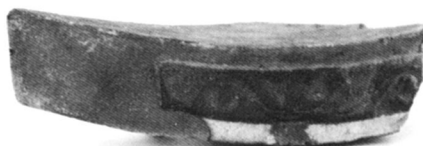
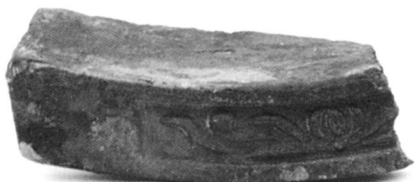
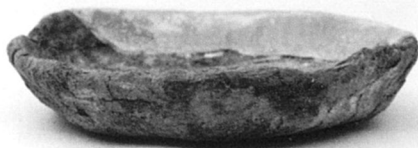
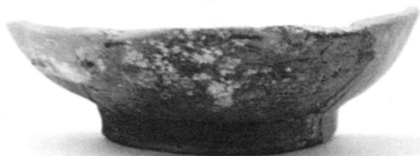
第16トレンチ



第15トレンチ全景



第15トレンチ断面





現況（3-OX から 4～7-OX を望む）



現況（7-OX から 3～6-OX を望む）



6-OX 現況



14-OX 現況



3-OX コッパ散乱状況



4-OX コッパ散乱状況



10-OX 調査前



10-OX 調査中の状況



10-OX 縦断面



10-OX 横断面



10-0X調査終了状況



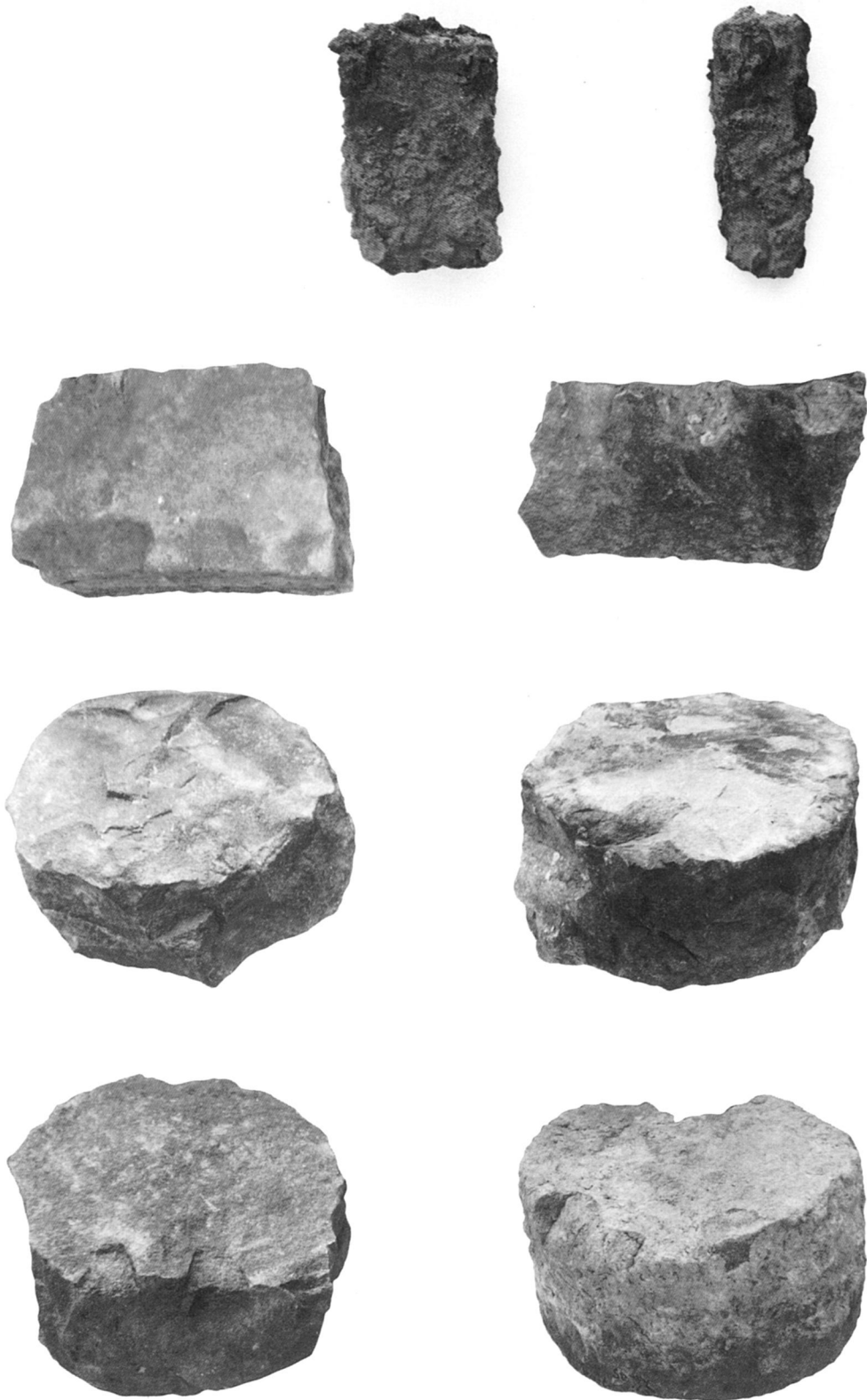
10-0X調査終了状況



第1トレンチ



第2トレンチ



(財)大阪府埋蔵文化財協会報告第9輯

阪南丘陵埋蔵文化財

—試掘調査報告書—

昭和62年1月10日

編集・発行 財団法人 大阪府埋蔵文化財協会
大阪市東区谷町2丁目36番地大手前ウサミビル

印刷 川西軽印刷株式会社

